

リ
セ
ツ
ト
5

◀バルナド

モルガナの兄。
キーラに協力するが、
その正体は……

◀モルガナ

占いでキーラに
助言する、盲目
の巫女。

◀リュシオン(18歳)

クレセニアの王太子。
強大な魔力を持つ魔法使い。

▲キーラ

クレセニア王妃で、
リュシオンの継母。

コーデリア ▲

ルーナのクラスメイト。
周囲に冷たい態度を取る。

▲カイン(17歳)

ルーナに助けられ、公
爵家に身を寄せていた
少年。実はエアデルト
国の第二王子。

▲フレイル(16歳)

レングランド学院に通う精
霊使いの少年。他人には
その力を秘密にしている。

ルーナの守護者たち

▲ルーナ(10歳)

ちゆき
千幸が転生した姿。
リヒトルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

▲風姫&水姫

風の精霊王と水の精霊王。
本来は絶世の美女だが、
現在は幼女の姿。

▲レグルス&シリウス

神獣。真の姿はそれぞれ
黄金の獅子と白銀の狼。

▲千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

第一章 新生活のはじまり

あなたの傍には、支えになってくれる誰かいますか？

王都ライデル東区の象徴といえ、クレセニア王国が誇る王立レングランド学院である。

その歴史は二百年を越え、現在に至るまで魔法使いをはじめ、技師、研究者、医療従事者など、様々な分野で優秀な人材を輩出してきた、国内最高学府だ。

そんなレングランド学院の講堂では、一月半ばの今日、新生生の入学を祝う式典が行われていた。講堂の肌色がかった壁には、装飾的な模様と共に、学院の象徴でもあるグリフオンの意匠が金箔で施されている。天井の中央には、天使に祝福される賢人が、フレスコ画で描かれていた。

建物はもともと劇場として利用できるように作られた。そのため、舞台から見ると両側にはボックス席が、さらにその奥には貴賓席まである。それらは今日、来賓と上流階級の父兄用として使われていた。

「新生生の諸君、ようこそレングランド学院へ」

舞台に設けられた壇上で挨拶するのは学院長、ロドリゴ・マティス卿だ。熊を思わせるような

厳いびくついで巨軀きよくからは、それに見合ったよく通る太い声が発せられる。

呼びかけられたのは、藍色を基調とした真新しい制服に身を包む生徒たちだ。間を開けて、その後ろには上級生と思われる生徒たちも着席している。全校生徒は、二百人強といったところだ。

(やっぱり不思議な感じだよね……)

厳びそかな式典が進む中、新入生としてその場にいた少女は、そんな感想を心の中で漏らした。

少女の名はルーナレシア・リーン・リヒトルーチェ。

皆からルーナと呼ばれる彼女は、クレセニア王国の中でも名門と名高いリヒトルーチェ公爵家の末娘だ。そして、今年からレングランド学院に通うことになった新入生の一人でもある。

その彼女が不思議だと評したのは、自分と同じ新入生たちのことだった。

周りに座っている三十人ほどの男女だけでも、見事に年齢がバラバラだったのだ。『新入生』という言葉が似合う、初々しい少年少女はわずか。むしろ教師と言われた方がしっくりくるような年齢の生徒も多い。

(前に父様と学院に来たときにも思ったけど、同級生の年齢がバラバラって、テレビで見た夜間学校みたいだよね)

剣と魔法の世界である、このサンクトロイメには存在しないテレビ。にもかかわらず、そんな単語がルーナの感想に出てくるのには理由がある。実は彼女、前世の記憶を持っているのだ。

ルーナの前世は、この世界とは違う地球という異世界。かつては高崎千幸たかきちゆきという名の、日本人の少女だった。

彼女がサンクトロイメに転生して十年。日本ならばすでに小学生だが、ここではようやく、教育機関で学べる年齢だった。

レングランド学院に入学するには、難関である試験に合格しなければならない。そのため入学資格は十歳以上だが、その最低年齢で入学する者はほんの一握りだ。

一般市民は、通常十歳から十二歳の間で市井しぜの学問所や学校に通い始め、三年から五年で卒業を迎える。

しかしレングランド学院の入学試験内容といえは、その学問所や学校の卒業レベルというのだから、生徒の年齢層が高めになるのも仕方がないのだろう。

富裕層の人間ならば、幼い頃から家庭教師をつけて学ぶこともできるが、そもそも庶民にはそんな金銭的余裕がない。どんなに優秀な者でも、市井の学問所を卒業してから受験するため、自然と特権階級の者よりも年長者が多くなるのだ。

そんな事情から、新入生の中にごくわずかにいる、ルーナと同年代の少年少女たちは、皆、育ちが良さそうだった——上流階級、少なくともそれに準じる階級の出なのだろう。

だからこそと言うべきか、ルーナのように特権階級出と思われる生徒への視線は厳しい。

己おれの才覚だけでレングランド学院という狭き門に滑り込んだ者たちは、それゆえ権力や財力といった後ろ盾がある者への妬みねたや僻みひがみを抱えている。その思いが、かの者たちの入学には実力ではなく、何らかの取引があったのではないか、という憶測を生むのだ。

もちろん授業が始まれば各生徒の実力は明らかになり、そのような邪推じやくいも消えるのだが、まだ学

校生活は始まってもないので、それもかなわない。

そうした経緯を、学院の先輩でもある兄妹たちからすでに聞きかじっていたルーナは、無遠慮に投げかけられる視線にため息を零した。

（うーん、なんかあちこちから視線を感じるんだけど、やっぱり裏口とか思われてるのかなあ？）
しばらくこの状況が続くのか、とルーナはうんざりする。だが実際のところ、それは彼女の思い込みに過ぎなかった。

確かにそのような視線もあるにはある。しかし大半は裏口疑惑ではなく、ただ彼女を見た途端、目が離せなくなったというだけだった。

十歳になったばかりとはいえ、近い将来類い稀なる美女に成長するであろう愛らしい少女。

真っ直ぐな珍しい銀髪に、赤子のようなきめ細かい白磁の肌。豊かな感情を表す緑の瞳が、美しい容姿をさらに引き立たせている。思わず見とれてしまうのも無理はない。

けれど、ルーナにとっては鏡で見慣れた自分の顔。さらに前世の記憶があることで冷静に自分を見る癖がついており、人並み外れた容姿だという自覚はあるものの、それが周囲にどう影響をおよぼすかは未だに自覚できていなかった。

「――それでは諸君、どうか実りある学院生活を送ってくれたまえ」

学院長の言葉と共に拍手が起こる。ルーナはハッと意識を戻すと、慌てて周囲と同じように手を叩いた。

（えーと、あとはなんだろう？）

壇上から降りる学院長を目で追いながら、ルーナは次のプログラムを予想する。今までのところ、在校生代表からと来賓の祝辞、学院長の話等、前世の彼女が日本で経験した入学式とさほど変わりはなかった。

（また偉い人のお話とかかな……）

ルーナが思ったのと同時に、ワツと会場が沸く。この場にいる全員の視線を引きつけ、壇上へと上がったのは、クレセニア王国の若き王太子リュシオンだった。

先月、成人となる十八歳を迎え、同じ月にこのレングランド学院を卒業したばかりのリュシオン。彼はこの日、父である国王の代理として母校を訪れており、その傍らには側近であるジーンの姿もあつた。

リュシオンは堂々とした態度で壇上に立つと、力強い眼差しを会場に向けた。

すらりと伸びた長身に、真っ直ぐな漆黒の髪、深い瑠璃色の瞳を持つ王太子は、その端正な顔立ちと優雅ながらも堂々とした立ち居振る舞いで他者を圧倒する。

（来賓って王様じゃなくて、リユーなんだ）

レングランド学院は王立学校であるため、式典に国王が列席することは珍しくない。

ルーナがぼんやりとリュシオンに目を向けると、同じく彼女を見やった彼と視線が交わる。

「あっ……」

ニツと悪戯っぽく口角を上げるリュシオンに、ルーナは小さく声をあげる。そんな彼女の反応に満足そうな表情を浮かべると、彼はおもむろに口を開いた。

「新入生の諸君、入学おめでとう。このレングランド学院は、フォーン大陸で最も長い歴史を持つ教育機関だ。現在では卒業生たちが指導者あるいは研究者となり、クレセニア、ひいては大陸の発展に貢献している。そんな学院に今日入学した諸君らもまた、歴史あるレングランド学院の名声を高める礎いしずえとなってくれることを、切に願う——」

拡声の魔道具マジックツールによって、リュシオンの落ち着いた声が会場に響く。皆がその姿に注目する中、彼は堂々と祝辞を述べていった。

「最後に、この学院で学んだ知識が諸君の大きな力となり、ゆくゆくは国の助けとなることを祈る」そう言つて、魅力的な笑みを浮かべた彼に、ルーナはありえないと顔を引き攣くっらせる。

（うわあ。めちゃくちゃ猫かぶりな笑顔だよ。……うん、詐欺さぎだね、あれは）

近しい者以外には、あまり愛想の良くない——またそれが許される立場のリュシオン。しかし自分の容姿に愛想を添えた時の効果は熟知していた。

だがルーナからしてみれば、そんな時に使われる彼の作り笑いには違和感しか感じられない。一斉に顔を赤らめる女性たち——一部男性もいるのが恐ろしい——を見て、ますます顔を引き攣くっらせたのだった。

十

「ルーナ！」

式典が終わると新入生たちは、各々決められた教室に向かうことになっている。皆にならつて講堂を出たルーナは、後ろから名前を呼ばれて立ち止まった。

そこには日に当たつて輝く金髪と、晴れ渡る空のような碧眼へきがんを持つ少年——二番目の兄ユアンと、目を引く紫紺むらさきの髪を後ろで一括ひとくりにし、猫のようにつり上がった琥珀色の瞳を持つ少年——フレイルがいた。

「ユアン兄様！ フレイルも！」

ひらひらと手を振つて微笑むユアンと、いつものように仏頂面ぶつちやうめんのフレイルがゆっくりとルーナに近づく。

「入学おめでとう、ルーナ」

優しく言つて、ユアンは妹の頭を撫なでる。何も言わないが、フレイルも少しだけ口角を上げたのを見て、ルーナははにかみながら礼を言った。

「ありがとう兄様。これからよろしくね」

「もちろん！ 何かあったらいつでも僕に言うんだよ？ いじめられたら百倍にして返してあげるし、ルーナに近づく変な虫は捻ひね潰つぶしてあげるから」

ユアンは優しい顔に満面の笑みを浮かべる。表情とまったく合っていない兄の不穏な台詞せりふに、彼女はうなずいて良いべきか悩む。

（百倍返してやりすぎじゃ。……ていうか、変な虫って絶対そのままの意味じゃないよね？）

ルーナが一人暴走しているユアンの対応に困っていると、それまで黙っていたフレイルが助け船

を出した。

「おいユアン。おまえ、課題を提出してこないといけないんじゃないやなかったのか？」

「あつ、そうだ、急がなきゃ！」

フレイルの言葉に、ユアンは呆然とするルーナの手を慌ただしく取る。

「ごめんルーナ。僕、行くところがあるから、また後で！ 明日のお昼は一緒に食べようね！ よし、フレイル早く行こう」

「え、あの、ユアン兄様……」

戸惑ったままのルーナを残し、ユアンはもう背中を向けて駆け出している。そんな彼にため息を一つ零すと、フレイルはルーナに向き直った。

「じゃあ俺も行く」

「うん。ありがとうね、フレイ」

「俺は何もしていない」

礼を言われ、フレイルは不意そうに眉間に皺を寄せる。

「そんなことないよ。実は心細かったみたいで、兄様とフレイルに会えてホッとしたんだ」

「そうか……まあ、何かあれば言え。手助けできることなら、してやらないこともない」

「うん！ これからよろしくね」

「ああ」

ぺこりと頭を下げるルーナにうなずくと、フレイルは背中を向けて行ってしまった。そっけない

態度だったが、そもそも嫌ならば顔も見せないだろう。不器用でわかりにくい彼なりの気遣いを感じ、ルーナは去って行くフレイルの背中に小さく微笑んだ。

ユアンとフレイルを見送って一息ついたルーナは、改めて周囲を見渡す。

セキュリティの厳しい学院だが、今日は新入生の家族の立ち入りが許されているので、学生以外の姿も多く見られた。

（まだ教室に行く時間まで結構あるよね……）

さて、どうしようとばかりにもう一度辺りを見渡したルーナは、ある一ヶ所に人々の視線が集まっていることを気づく。

（なんだろう？ 何かあるのかな？）

さりげなく皆が注目している場所へ視線を向け、彼女はそこに自分の両親の姿を見つけて目を瞠る。
（父様と母様!?）

似合いの美男美女の煌びやかな姿は、気品ある物腰と相まってあきらかに周囲とは一線を画していた。
（なるほど、これは注目の的だよね……）

そんなことを思っただけでルーナが見つめていると、彼女に気づいた両親が手を振ってきた。

「父様！ 母様！」

慌てて両親に駆け寄ったルーナは、彼らの前で立ち止まると嬉しそうに微笑んだ。

「思ったより人が多くて、もう見つからないかと思っていたのよ。よかったわ」
母親であるミリエルがそう言って笑いかけると、ルーナはコクンとうなずく。

「さっきね、ユアン兄様とフレイに会ったんだよ。二人とも言わなかったけど、わざわざわたしを探してくれたみたい」

「そう、ユアンが。フレイル君も相変わらずあの子に振り回されているのね」
クスクスといつもの二人の様子を思い出してミリエルが笑う。

ルーナと知り合つて後、週末にリヒトルーチェ邸を訪ねてくるようになったフレイルのことは、ミリエルのみならず、父アイヴァンもよく知っていた。そして彼が、自分たちの子どもに振り回され気味なことも承知していた。

「それにしてもルーナも学院の寮に入るとなると、邸が寂しくなるな」

母子の語らいを見守っていたアイヴァンは、ルーナの頭を撫でると寂しげにつぶやく。

アイヴァンはリヒトルーチェ公爵として多くの領地を治め、また王宮では国王の片腕として政にも携わっている。

多忙な日々を送っている彼だが、それでも忙しさにかまけて家庭を顧みないようなことはない。それどころか時間を見つけては、子どもたちと積極的に関わっていく良き父親なのだ。

「週末には、兄様や姉様と一緒に邸に帰るよ？」

慰めるようにルーナが言えば、アイヴァンは穏やかな笑みをその顔に浮かべる。

「ああ、そうだな。これも成長か……」

感慨深げにつぶやく父を、ルーナはクスリと笑って見上げた。

「そうだよ。普通は皆、入学式の前には入寮してるのに、父様が今日からでいって言うから、わたしだけまだ寮に行ったこともないんだからね」

「入学するまでうちの子でいいじゃないか！」

ルーナの苦笑混じりの抗議に、アイヴァンは真面目に言い返す。

「父様……入寮したって、わたしは父様の子に変わりないけど……」

「そうなんだが、やはり、週の大半を寮で過ごすとなると寂しくはないか？」

子煩悩な父親に呆れつつも、ストリートな愛情を示されたルーナは、くすぐったい思いに頬を緩めた。そんな父娘のやり取りに、ミリエルは優しく目を細める。

「でもそうね。ジーンなんて、成人してからアイヴァン並に忙しくなってしまうって、最近は王宮に泊まり込んでいるんですもの。先ほどの式典で、久しぶりにあの子の顔を見たわ」

「そうだな。私もだ」

二人の言葉を聞いて、ルーナは式典に出席したリュシオンに、影のように付き従っていたジーン
の姿を思い浮かべる。

「そういえば、式典には陛下じゃなくてリユー……リュシオン殿下が出席してたね」

ルーナが何気なくつぶやくと、唐突に第三者の声割って入った。

「それはね、殿下がどうしてもって陛下を押しつけたせいなんだよ」

「え？」

「おい、ジーン！」

背後からの声にルーナは慌てて振り返る。するとそこには、悪戯つぼく微笑んでいる長兄ジーンと、苦々しい表情で彼を睨むリュシオンがいた。

突然の王太子の出現に、遠巻きにルーナたちを見守っていた周囲が、一気に遠ざかる。

「ジーン、それに殿下まで」

「まあ、リュシオン殿下。ご無沙汰しておりますわ」

アイヴァンが気づいて声をかけると、続いてミリエルもふわりと笑って淑女の礼をとる。リュシオンはアイヴァンを見て一瞬間を顰めたものの、ミリエルには愛想笑いとは違う穏やかな笑みを返した。

「お久しぶりです、公爵夫人。相変わらず月の女神のごとお美しいですね」

「まあ、殿下ったら。そんな歯の浮くようなお世辞をいつ覚えられたのかしら」

ミリエルがリュシオンの言葉にクスクスと笑っていると、アイヴァンが愛妻を隠すように一歩前を出てきた。

「殿下、ミリエルを口説くのは止めて下さい」

「……公爵も相変わらずだな」

すかさず抗議するアイヴァンに、言いがかりをつけられたリュシオンはうんざりしたようにつぶやいた。

だがそれに対してアイヴァンは、にこやかに言い返す。

「我が愛妻が美しすぎるものですから」

「もう……いやですわ、あなたったら殿下の前で」

「本当のことだろうか？」

夫の言葉に頬を染めるミリエルと、そんな妻に甘く囁くアイヴァン。周囲を完全に置いてきぼりにして盛り上がる公爵夫妻に、リュシオンは困ったように頭を掻いてルーナへと向き直った。

「あつちは放つとくか……」

「ふふっ。父様は母様大好きだからね。まあ両親が仲良しなのは良いことだよ」

ニコニコとリュシオンに答えたルーナだったが、彼の表情が一瞬強張ったのを見て小さく息を呑む。

(あ……)

リュシオンの様子に、ルーナは彼の家族関係を思い出した。

クレセニア王国の王太子であるリュシオンと、王妃であるキーラには血の繋がりが無い。最初の妃だったリュシオンの母は、彼が幼い頃に亡くなっており、その後キーラが国王の二人目の妃になったのだ。

生さぬ仲の義母とは仲むつまじいどころか、リュシオンは邪魔な存在として、命さえ狙われている。

そんな母子関係に加え、国王と王妃の夫婦関係や、リュシオンの異母妹であるネイディアとの関係など、王室の家族関係が冷え切ったものなのは公然の秘密だった。

「気にするな」

リュシオンは不用意な発言をしてしまった罪悪感で俯くルーナの頭を乱暴に撫でる。そんな気ま



ずい空気を破るかのように、それまで黙っていたジーンが明るく話題を変えた。

「ルーナ。今日の式典で、リュシオン殿下が来賓なのは何故だか知っているかい？」

「そういえば、さつきもそんなことを言ってたよね。陛下を押しつけたとか……」

ジーンの思惑通り話に乗ってきたルーナに、彼は悪戯っぽく片目を閉じた。

「そうそう。本当はちゃんと陛下が列席する予定だったんだよ。だけど、リュシオン殿下がどうしても自分が行くときかなくてね」

「おいっ、勝手に話を作るな！」

困ったとばかり、大げさに眉尻を下げるジーンに、抗議の声をあげるリュシオン。相変わらずな二人のやり取りに、ルーナは堪えきれずにクスクスと笑い出した。

「嘘つきよばかりは失礼ですね。今回のことも突然言い出されるものだから、スケジュールの調整が本当に大変だったんですよ」

笑いながら肩を竦めるジーンを、リュシオンはムツとして睨みつける。

「黙れジーン！ 父上が多忙で出席が難しいと言うから、たまたまスケジュールに空きがあった俺が代わっただけだろうが。決してねじ込んだり、押しのけたりなんかしてないぞ」

「へえ、スケジュールの空きなんて、ありましたっけ」

「あつただろうが！」

リュシオンはとぼけるジーンにムキになって反論する。

「まあ、殿下の名誉のため、そういうことにおきましようか」

「くっ……」

面白がっているとしか思えないジーンの状態に、リュシオンは苦虫を噛みつぶしたような顔でふてくされる。その姿は端から見れば完全にジーンに遊ばれているもので、ルーナは悪いと思いつつも、つい笑ってしまうのだった。

そうした他愛もない掛け合いに三人が興じていると、それを夫と共に微笑ましく見守っていたミリエルがふと気づいたように言った。

「ルーナ、そろそろ教室に向かった方が良いのではなくて？」

「え？」

母の言葉にルーナが周囲に目をやると、先ほどまで大勢の生徒や新入生の家族がいたはずだが、今は数人の生徒たちしかない。

「大変！ わたし行かなきゃ」

「ああ。週末に会えるのを楽しみにしているよ、ルーナ」

「お勉強、頑張るのよ」

慌ただしく言って駆け出すルーナの背中に、アイヴァンとミリエルは笑いながら声をかける。その様子に、リュシオンとジーンは笑って顔を見合わせたのだった。

十

「――Aだから、ここだよね」

ルーナが恐る恐るといった様子でドアを開けると、教室にはすでに十人ほどの男女がいた。

前方に大きな黒板と教壇があり、向かいあうように木製の長机がゆったりとした間隔で並んでいる。席は決まっていないようで、ちらほらと着席している生徒がいる他は、適当に集まって立ち話をしているようだった。

「し……失礼します！」

ルーナが緊張のあまり、無駄に大きな声を出して教室に入ると、彼女に気づいた生徒たちは、皆ポカンとした表情を向けてきた。

（う……なんかおかしいの？）

慌てて、足元から順に自分の服装を点検していくルーナ。とりあえず見える範囲におかしな点はないと安心する彼女に、教室でも最年長と思われる男性が口を開いた。

「やあ、お嬢さん。こんにちは」

見たところ五十代半ばだろうか。がっしりとした体型の男性は、強面を緩めてルーナに笑いかけ。すると、他の生徒も続いて声をかけてきた。

「こ、こんにちは」

皆の好意的な様子にホッとしつつ、ルーナははにかみながら挨拶を返す。その恥ずかしそうで稚い様子に、教室にいたほとんど全員が内心悶えていた。

「あ、あのさー！」

そんな中、ルーナと同じ年頃の男子が声をあげ、全員が彼に視線を向けた。が、彼が続けようとした言葉は、教室に入ってきた人物によって遮られる。

「とりあえず、適当な席に着いて下さい」

現れた女性の、きびきびとした涼やかな声に促され、教室にいた生徒たちは急いで着席する。それを教壇から確認した彼女は、よろしいと言うようにうなずいた。

「皆様、レングランド学院への入学おめでとうございます。わたくしはこのクラスの担任となりました、オルガ・クルースと申します。一年間どうぞよろしくお願いしますわね」

そう名乗った中年女性は、先ほどまでの厳しい表情を和らげて微笑む。茶色の髪をきつちりとひつつめ、丸い眼鏡をかけた姿は、一見すると厳格な女教師だ。けれど笑顔になった途端、その印象が一変する。親しみやすそうな雰囲気生徒たちの緊張もほぐれた。

「これから一通り学院の説明と、注意事項をお話ししたいと思います。その後は簡単に自己紹介をしてみますわね」

クルースの言葉に、ルーナを含め、教室の全員が真面目にうなずく。そして彼女が黒板を使って話し始めると、真剣に耳を傾けた。

やがて説明や注意事項を語り終えると、クルースはチョークを置いて教壇に両手をつく。

「それでは次に、皆様の自己紹介をしていただきましょう。本年度の一年生は、ここAクラスからCまでの三クラス。他のクラスとも合同授業や選択授業などで交流はあると思いますが、まずはこのクラスの中で親睦を深めていくこと。それでは、窓際の彼から順にお願いいたします」

クルースが窓際の赤毛の少年を促すと、彼は「はいっ」と元気よく立ち上がった。ルーナより少しばかり背が高い少年は、担任が現れる直前、ルーナに声をかけようとしていた彼だ。

赤銅色の短い髪はツツンとあちこちにはねており、くりくりとした目は青玉のような碧眼だ。

赤毛の人間の大多数がそうであるように、色白の彼の頬にもそばかすが散っている。それが彼の明るい雰囲気によく似合っていた。

「俺はエルネスト・ウェイ・ダヴィル、十歳！ 武術が好きだから本当は士官学校に行きたかったんだけど、この授業も色々あって面白そうだから楽しみにしてる。えーと、長所は明るく元気な性格……って母上が言ってたからそうなのかな？ 父上や姉上には落ち着きがないとか言われるけど。あと特技は乗馬！ これだけは大人にも負けないぜ！ ……つとこんなもんかな？ ま、とにかくよろしくな！」

元気づげる自己紹介の後、ニカッと効果音が聞こえてきそうな笑顔で、彼——エルネストは言った。その様子を見て、ルーナは思わず心の中でつぶやいた。

（なんか少年マンガに出てくる熱血系主人公みたいな子……皆、呆気にとられちゃってるし）

十歳という入学最低年齢なこともあり、育ちが良く優秀なのは予想できる。その彼から、富裕階級の子息らしからぬ挨拶が飛び出したことで、皆が戸惑っていた。

しかし本人は、そんな周囲の反応を気にした様子もなく、「じゃ、次どうぞ！」と無邪気に言うと、さつさと着席してしまった。

「では、次は後ろの貴女、お願いしますわ」

エルネストの言葉に苦笑したクルースは、次に彼の後ろに座る少女へと声をかける。するとエルネストときどき背丈の変わらない少女が、すくつと椅子から立ち上がった。

肩につくつかないかという真つ直ぐな青藍の髪に、同じ色の瞳。整った中性的な顔立ちをしているが、あまりにも表情がない。

年相応にやんちゃそうなエルネストの後だったので、よけいに彼女の無表情が目立った。

「コーデリア・タニア・クライン。十一歳」

良く通るアルトが、名前と年齢だけの簡潔すぎる自己紹介を紡ぐ。そのまま一礼し、席に座ろうとした彼女を、クルースが慌てて声をかけて止めた。

「名前と年齢だけ？ 特技や趣味など、他にアピールするものはないのかしら？」

「特に。わたしはここに勉強のために来ているのであって、仲良しごっこがしたいわけではありません。これで十分だと思います」

コーデリアは一切表情を変えないことなく、淡々と言い放った。教室がざわめくが、彼女は自分の発言を後悔した様子もなく、しっかりと顔を上げて正面を見据えている。

クルースはコーデリアの頑なな態度に眉尻を下げると、悲しげにつぶやいた。

「確かにここは学ぶための施設だわ。でもね、その中で知り合った仲間もまた、知識と同じく貴女の宝物になるのよ」

教師の言葉は多くの生徒の心に響いたが、肝心のコーデリアは無反応だ。感情の読めない彼女の様子に、クルースは小さく嘆息したものの、気を取り直して次の生徒を手を促した。

指名された生徒はクルースと同年代の四十ほどの女性。場の空気を読んでか、明るく自分の趣味について語り出した。

ルーナはクラスメイトの自己紹介に耳を傾けつつも、先ほどのクルースの言葉を思い返していた。(そうだよ。学校で得た友達わたし……千幸の宝物だった)

ルーナの頭に前世での学校生活が蘇る。好きな教科だけでなく嫌いな教科もあって、すべての授業が楽しかったわけではない。心ないいじめにも遭い、思い出すのも嫌な記憶も多い。それでも学校という場で知り合った、かけがえない友人がいたのだ。

苦しい時、辛い時には傍で一緒に泣いてくれ、楽しい時、嬉しい時には一緒に笑ってくれた親友(また、彼女みたいな友達が出来るといいな。……ううん、「いいな」じゃなくて「作ろう！」だよ)ルーナは、今では世界さえ分かれてしまった親友に思いを馳せ、次いでこの世界での新たな学校生活を築きもうと誓う。

(そのためにはまず、自己紹介で好印象を持つてもらわないとね！ あと仲良くしてもらえるように、お願ひもしなくっちゃ。でもこんな大勢の前でしゃべるのって緊張するよお……)

「では、次はその貴女」

クルースに指し示されたルーナは、一度深呼吸した後、勢いよく立ち上がる。

「ルーナレシア・リーン・リヒトルーチェと申します。年は十歳です。特技は料理とお菓子作りで、運動は得意ではありません。魔法だけでなく、魔道具製作にも興味があるので、レングランド学院ではそういったことを学びたいと思います。世間知らずでご迷惑をおかけするかもしれませんが、

いろんなことを皆さんに教えていただければありがたいです。それで……えっと……」

そこまでスラスラと続いていたルーナの挨拶が急に途切れた。周囲は不思議そうに次の言葉を待たず。

すると彼女は、俯^{うつむ}き、もじもじと両手を交差させた後、意を決して顔を上げた。「よ、よかつたら、わたしと仲良くして下さい！」

真っ赤になって叫ぶように言い切るルーナ。生徒たちは一瞬呆気にとられた後、思わずといった様子で爆笑する。

「え？ え、ええ!？」

何故笑われているのか分からないルーナは、狼狽^{うろた}えて生徒たちの顔を見渡すが、その焦^{あせ}っている様子がまた可愛らしい。彼らの笑いはまったく収まる気配がなかった。

そんな生徒たちを両手で制し、クルースが笑みを浮かべて窘^{たじま}める。

「皆さん、そんなに笑ってはいけませんわ」

「すみません。いや、なんとも可愛らしいお願いをされたので……笑ってすまなかったね」

教師の言葉に頭を掻きながら、最年長の男性が謝ると、次々と教室のあちこちから謝罪の言葉があがった。

「ごめんな。こっちこそ是非仲良くしてくれよ」

「ふふ。こちらこそよろしくね」

気安く声がかげられ、ルーナはホッと緊張を解く。

「はい、あの、よかつたらルーナって呼んで下さい」

彼女がそうお願いすると、パチパチと好意的な拍手が返ってきた。

大貴族の令嬢であることを鼻にかけるどころか、真っ赤になって「仲良くしてほしい」と訴える少女。偏見を抱く者たちの大半がその考えを改めたなどは、当の本人は知る由^{よし}もなかった。

+

入学後のホームルームが終わりクルースが教室を出て行くと、それを見送った生徒たちも各々^{おのおの}帰り支度を始めた。

ルーナは席に着いたまま「ふう」と息を吐くと、ぼんやりと正面の黒板を眺める。

(なんとか終わったあ。知らない間に緊張してたのか、思った以上に疲れたよ……)

前世の、高崎千幸という十八年の人生経験があるため、ルーナ自身は十歳児といえど、大抵のことには落ち着いた対応ができる自信があった。

けれど公爵令嬢として転生し、限られた人間に囲まれて育ったことで、知らず人見知りに近い状態になっていたようだ。初対面の人間たちに囲まれ、気疲れでぐったりしていた。

(とにかく、寮に帰ってゆっくりしよう……てか、今日から寮がもう一つの家なんだよね。なんか不思議な感じがするかも)

ルーナは新しい生活が始まったことを実感しつつ、ゆっくりと席を立つ。

ほとんどの生徒は一週間ほど前から寮生活に入っているが、彼女の場合は入学式の今日からだ。両親——主に父親——が、入学式ぎりぎりまで自宅で過ごすようにとごねたためだ。

(適当に人の流れについて行けば、なんとかなるかなあ)

そんなことを思い、とりあえず教室を出ようとしたルーナだったが、廊下の方から聞こえてくるざわめきに数歩で足を止めた。

「なんだろう？」

つぶやいた瞬間、彼女に伝えるように、教室の入り口から二人の女子生徒が顔を出す。

「ルーナア！」

「ルーナ様！」

同時に発せられた明るい声の主は、ルーナは目を丸くした。そこにいたのは彼女の姉であるアマリーと、その友人であるエレイナだった。

「アマリー姉様！ それにエレイナも」

「ゲッ！」

ルーナが二人に嬉しそうに声をかけると、彼女の後ろからカエルがつぶされたような声が被る。不思議に思つて彼女が振り返ると、そこには青ざめた顔の少年——エルネストがいた。

どうやら先ほどの奇声は彼が発したものらしい。そして同じく彼の存在に気がついたエレイナは、驚いたように声をあげた。

「あら、そんなところにいたのね。エル」

顔色を悪くしたまま固まっているエルネストへ、エレイナは人の悪い笑みを浮かべて近づいて行く。知り合いらしき二人を交互に見やり、ルーナはただ不思議そうに首を傾げていた。

アマリーはそんな妹に微笑みかけると、エレイナとエルネストを交互に指し示す。

「エレイナとエルネストは姉弟よ。彼はダヴィル子爵家の跡取り」

「ええ!？」

ルーナが思わず声をあげると、アマリーは楽しげに笑い出した。エレイナはルーナの反応に苦笑し、エルネストはどこか疲れたように肩を竦めた。

「そういえば、自己紹介でダヴィルって言つてたよね。でもエレイナとは、ぜんぜん結びつかないよ……」

ばつが悪そうにルーナがつぶやくと、エレイナは気にした様子もなく笑顔で言う。

「ダヴィル姓なんてよくありますからね。それにわたしたちは全く似ておりませんので、見た目では姉弟と分からないのも無理はありません」

「だよなあ。俺が貴族らしくないのもあって、家名を名乗ってもダヴィル子爵家と結びつける人間はほとんどいないし」

エレイナの言葉にエルネストがうなずくと、エレイナはそんな弟に呆れた目線を寄せた。

「貴族らしくないというより、礼儀作法がなっていないのよ、まったく」

容赦ない姉の言葉に、エルネストは「うっ……」と言葉を詰まらせる。それを眺めながらルーナ

は、そういえば……と彼の元気いっぱいの挨拶を思い出し出していた。

(確かに礼儀作法という点、どうなのって感じの挨拶だったけど、不快には思わなかったんだよね。その辺はやっぱ育ちが良いからなのかな？ だとするとそれは逆に、貴族らしいってこと？)

褒めているのか貶しているのかわからない、微妙な感想をルーナが抱いているとは知らず、エレイナとエルネスト姉弟の言い合いは続く。

「ところで貴方。早速ルーナ様の前で何か恥を晒したんじゃないわよね？」

「なっ！ 俺は何も……！」

「本当かしら？ 貴方のことだから、『俺はエルネストだ。皆よろしくな！』とかいう変な自己紹介とか、したんじゃないかしら？」

エレイナの鋭すぎる勘に、エルネストは再度言葉を詰まらせる。やり取りを見守っていたルーナは感心して思わず声をあげた。

「すごい、エレイナ。まるでその場を見てみたい！」

その一言がエルネストを追い詰めるとは知らず、ルーナはパチパチとエレイナに拍手を送る。そんな彼女に、エレイナは「ふふん」と胸を張った。

「不肖の弟のことでしたら、わたしはすべてお見通しです！」

姉とは対照的のがつくりと肩を落としたエルネストは、若干恨めしそうにルーナを見た後、ため息混じりで口を開く。

「で、姉上はどうしてここに？」

「わたしはアマリー様と一緒に、ルーナ様のお迎えよ」

「お迎え？」

エルネストが聞き返すと、エレイナは弟をからかうのに飽きたのか真面目に答える。

「そうよ。寮までご案内しようと思って」

「ルーナはね、今日初めて入寮するの。だから一緒に寮まで行った方が迷わなくてすむかと思って」アマリーがエレイナの言葉を補足すると、エルネストは驚いた後、なるほどとうなずく。

「本当にアマリー様は、うちの姉上と違って妹君思いでお優しいですね」

「あら、ありがとう」

珍しく丁寧な言葉で返すエルネストに、アマリーはクスクス笑って礼を言う。それに不満そうなのはエレイナだ。

「まったく調子が良いのだから。アマリー様もエルをあまり甘やかさないで下さい」

「ふふっ。エルはうちの兄弟にはいないタイプだから、なんだか可愛くて」

アマリーの言葉に、ルーナは心の中で納得とばかりに手を打った。

(確かにジーン兄様とも、ユアン兄様ともタイプが違うよね。特に、ジーン兄様は頼りになるタイプだから、可愛いなんて間違っても言えないし)

「入寮が今日なら、寮監督の教師に会っておかないとだめじゃないのか？ ここでいつまでも遊んでいいのかよ」

ルーナがぼんやり考えている横で、呆れたようにエルネストが言う。そのもつともな意見に、エ

レイナとアマリーはハッと目を合わせた。

「そだったわ！ こんなところで愚弟を構っている暇などなかったのです」

(愚弟って……)

エレイナの身も蓋もない言い草に、反論を諦めて瞑目するエルネストへ、ルーナは同情の眼差しを送る。

「ルーナ様。こんな愚弟ですけど、腕はまあ、それなりに立ちますの。とりあえず盾くらいにはなれると思うので、どうぞご存分にお使い下さいな」

「ひでえよ、それ！」

さらなる姉の暴言に、愚弟と呼ばれたエルネストはすかさず抗議する。が、それはあっさりと無視された。ダヴィル姉弟の力関係をまざまざと見せつけられたルーナは、苦笑しつつ取り成すように口を挟んだ。

「盾とかは置いておいて、クラスメイトとして仲良くしてくれると嬉しいな」

「わかった、まかせろ！」

にっこりと笑ったルーナに、上目遣いでお願ひされたエルネストは、真っ赤になってコクコクとうなづく。するとそんなエルネストに、すかさず容赦ない鉄拳が振り下ろされた。

「この愚弟が！ ルーナ様に対してなんて言い方だ！」

「痛えよ、姉上！」

「黙れ、この馬鹿が！」

鈍い音を立てて、エルネストの頭にもう一度鉄拳が振り下ろされる。彼は涙目で姉を睨むが、エレイナには全く効果がない。

(うわあ、エレイナの鬼軍曹モード、ひさしぶりに見たよ……)

数年前、初めてルーナがレングランド学院に訪れた時のことだ。彼女を取り囲む外野に対し、エレイナが楚楚とした令嬢から、鬼軍曹と言わんばかりの軍人モードに一変したのだ。

当時のことを思い出し、遠い目をするルーナの横で、アマリーが仕方ないとばかりに仲裁に入る。

「エレイナったら。ルーナたちはクラスメイトになるのだから、多少砕けた態度でも良いじゃない」

「ですが……」

「わたしだって、本当は今でもエレイナに敬語で話しかけられるのは寂しいのよ？ 昔、絶対無理ですって貴女に押し切られてしまったけど、今でもあれは、わたしの不覚だと思っているわ」

「アマリー様……」

「そうだよ、エレイナ！ わたしのことだって『ルーナ』でいいのに。公式の場所では確かに体面を保つのも大事だと思うけど、ここはレングランド学院だよ。身分に関係なく学べる場所だもん。

エレイナもエルネストも、同じ生徒として接してもらおう方が嬉しいな」

アマリーとルーナの説得に、エレイナはしばらく考え込んでいたが、やがて仕方ないとばかりにうなずいた。

「わかりました。確かにお二方のおっしゃることもっともです。愚弟に関しては目を瞑りましょう。ただわたしの場合は、もう自分を変えることが難しいのでお許し下さい」

「貴女は無理なのね……」

「エレイナは駄目なんだ……」

二人の言い分を認めながらも、自分は砕けた態度を取らないと宣言するエレイナに、リヒトルーチエ家の姉妹は苦笑するしかない。

ルーナは気を取り直したようにエルネストに向き直ると、少しだけ上にある彼の目をじっと見た。「つてことで、同い年だし、仲良くしようね」

「お……おう。俺のことはエルでいい」

「エル、だね。わかった。わたしのことはルーナって呼んで？」

コテンと首を傾げて尋ねるルーナに、エルネストは「うっ」と呻くと慌てて顔を背ける。そんな弟に近づくと、エレイナは真っ赤になつて耳を引っ張りボソリと囁いた。

「間違つてもルーナ様をお慕いするなどという、身の程をわきまえないことをしないように。万が一そんなことになったら、容赦なく肅清するわよ」

「は……ひ……」

「よろしい！」

精も根も尽き果てたような弟の返事に、エレイナは居丈高に答えると、続いて無邪気な笑顔をルーナとアマリーに向けた。

「ではアマリー様、ルーナ様、参りましょうか」

「そうね。ではエル、ルーナのことよろしくね」

「はい、アマリー様」

エルネストは姉に対する口調をガラリと変えて、丁寧に答える。

どうやらエルネストの紳士スイッチは、アマリーと話す時だけに入るようだ。ルーナはそんな彼に苦笑しつつ手を振った。

「じゃあ、また明日ね、エル」

「おうっ！」

こうしてレングラウンド学院において一人目の友人を手に入れたルーナは、姉たちと共に、意気揚々と教室を出て行ったのだった。

十

レングラウンド学院の学生寮は、女子寮が敷地の南東に二つ、男子寮が敷地の南西に四つ設けられている。一つの寮に四十人ほど、一室に二人から四人が共同生活を送っていた。

女子寮の数からもわかるように、学院の女子生徒数は全体の三分の一ほどだ。

これは庶民階級に、女の身には学など必要ないという考えが未だ多いためである。親からの援助が望めず、自分で学費を貯めるために働いているうちに、進学を諦めて家庭に入る女性が大半だった。

富裕階級の令嬢にも一般教養以上の学は必要ないという傾向はある。学ぶといっても、淑女教育に重きを置いた花嫁学校に通う程度だ。それでは満足できない令嬢にしても、身分に関係なく生徒

は平等と謳うレングラウンド学院において、特別扱いもなく、身の回りの世話をする使用人もいない寮生活には二の足を踏む。

ただ、そういった令嬢の不満を解消するほどではないが、成績優秀な生徒と共に貴族出身者には暗黙のうちに相応の配慮もなされている。それがルーナの住まうことになる、特別仕様の二人部屋だった。

女子寮の外観は、町に溢れる素っ気ない集合住宅とは違い、貴族の邸宅を思わせるものだ。赤煉瓦と白い窓枠が美しいコントラストを描くそれが、二つ並んで建っており、ルーナの暮らす寮は校舎に近い方だった。

短い階段を上って白い扉を開けると、その先には玄関ホールが広がっている。左右には赤い絨毯を敷いた二つの階段があり、二階の廊下が続いていた。

玄関は建物の中央通りに位置していて、ホールから東西に長く続く廊下が見える。奥行きもあるのか、階段のさらに奥には両開きの扉があった。

「あの扉の奥が寮生共用の談話室になっているの。消灯までだったらそこで過ごしても良いのよ」奥の扉を指して説明するアマリーに、ルーナはふむむむとうなずく。アマリーは好奇心いっぱい妹に微笑むと、その手を引いて東側の廊下へと歩き出した。

「失礼します」

エレイナがそう言って扉を開けると、そこはこぢんまりとした応接室のような部屋だった。

窓際に大きな両袖机が置かれ、その手前にローテーブルと黒革のソファセット。机の横には装飾を施された背の低い本棚があり、その上にポストカードサイズの細密画がいくつか飾られていた。

室内に入ってきたルーナたちに、机で書き物をしていた人物が顔を上げる。皺の刻まれた柔和な顔立ちの老婦人だ。彼女は笑みを浮かべ、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「ああ、貴女がルーナレシア嬢ね？」

老婦人は鼻の上にかかっている丸眼鏡を外すと、机を回り込んで三人に近づいた。

「ようこそ、レングラウンド第一女子寮——通称白薔薇寮へ。わたくしはフィオナ・リプトン。この寮の監督責任者ですわ」

にっこりと微笑み、この寮監室の主フィオナはルーナたちにソファへ座るように促す。それに従い全員が腰を下ろしたところで、再びフィオナが口を開いた。

「早速だけれど、寮の説明をさせていただくわね。まず貴女の部屋は二階の八号室。ドアに名前のプレートがあるから、すぐにわかるところわ。ちょうど貴女のお姉さんの部屋とは、階段を挟んで反対側になるわね。寮の規則については公序良俗に反する振る舞いをしなければ大丈夫。細かい規定については、これに目を通してもらえるかしら。ああ、そうそう。これは貴女のお部屋の鍵。失くさないようにね」

「はい」

ルーナは真面目な顔でうなずくと、フィオナから渡された鍵をポケットにしまい、次いで冊子に目を通す。細かい条項が記されているが、ざっと見たところ、基本的な共同生活についての迷惑行

為をしないようにという内容だった。

「あら、大事なことを忘れていたわ」

規則について読み耽^{ふけ}っていたルーナは、フィオナが手を叩いた音で顔を上げる。

「貴女^{あなた}のペットについてだけど、本人がいないのに同室の子に預けるわけにはいかないから、公爵のご指示で、とりあえずアマリー嬢とエレイナ嬢のお部屋に預けられているわ」

「はい、それに関しましては、父から聞いております」

フィオナの言葉にアマリーが答えると、ルーナは思わずふにやりと顔を綻^{ほほ}はせる。

（寮なのにペットを連れてきてもいいなんて、ビックリだよね）

ルーナの前世の常識からすれば信じられないことだが、このレングランド学院では寮内でのペットの飼育が許可されているのだ。

もちろん最低条件として、飼い主がきちんと世話をすること、他人に迷惑をかける心配がないと、学院により判断された動物であること等が決められている。

ルーナがペットとして連れて来たのは、言わずと知れたシリウスとレグルスだ。人の目のあるところでは普通の犬猫を装っているが、本当の姿は神獣——聖なる狼^{おおかみ}と獅子^{しし}。人以上の知性を持っている彼らが、他人へ迷惑行為などするはずがなく、学院からは問題なく許可が下りた。

ちなみに彼らは随分前に子猫、子犬の姿から卒業している。現在は、シリウスは中型犬、レグルスは成猫の大きさになっているので、長い学院生活の間に成長していないと不審がられる心配もない。

「早く姉様たちのお部屋に、しいちゃんたちを迎えに行つてあげなきゃだね」

「あの子たちなら、大人しく寛^{くわん}いで待つてそうだけど」

「そうかもー」

クスクスとリヒトルルーチェ家の姉妹が笑い合っていると、フィオナが穏やかに口を挟む。

「だいたいの説明はしましたし、細かいことはお姉様方にお聞きすればよろしいでしょう。もう行つて構いませんよ」

「すみません、ありがとうございます！」

「いいえ。何か困ったことがあれば、気軽に申し出て下さいな」

「はい！」

元氣よく答えると、ルーナは微笑むフィオナに見送られ、寮監室^{りょうかんしつ}を出て行つた。

廊下を戻り、玄関ホール階段を上がると、前方と左右の三方向に廊下が分かれていた。前方は突き当たりになっており、窓の下に花が生けられた大きな花瓶があるだけだ。

左右に続く廊下には、ドアがたくさん並んでいる。ルーナは姉たちの案内で、右側の廊下——建物の東翼^{とうよく}へと歩き出した。

いくつかのドアを通り過ぎ、廊下の一番端にあるドアの前で、先頭を歩いていたエレイナが立ち止まる。

「ここがわたしとアマリー様のお部屋ですわ」

ルーナがドアを見上げると、そこには金色のプレートで『A・リヒトルルーチェ』『E・ダヴィル』

と書かれていた。

エレイナが制服のポケットから鍵を取り出してドアを開けると、次の瞬間、白銀と黄金の毛玉が飛び出してきた。

「しいちゃん！ れぐちゃん！」

しゃがみ込んで広げたルーナの腕に飛び込み、顔を擦り寄せる毛玉——シリウスとレグルスを、ルーナは嬉しそうにモフモフと撫でまくる。

「本当に貴方たちはルーナが好きねえ」

「ああ、もう、動物と戯れるルーナ様とか、可愛すぎます！」

二匹の様子に苦笑するアマリーと、それにじゃれつかれるルーナに悶えるエレイナ。

姉とエレイナの言葉で我に返ったルーナは、恥ずかしそうに立ち上がると、誤魔化すように言い出した。

「えーと、じゃあわたしは自分の部屋に行くね」

「ええっ！ 今お茶を淹れますから、ゆっくりしていかれてはどうです？」

早々に退散を告げたルーナを、エレイナがすかさず引き留めるが、ルーナは申し訳なさそうに眉尻を下げると首を横に振った。

「ごめんね 初日だから緊張してて疲れちゃったみたい。明日からは授業も始まるし、今日は準備をしたら部屋でゆっくりしようかなって……うーん、でも姉様たちにはいろいろ教えてほしいし、明日の放課後、また訪ねてきていい？」

「もちろんよ、それなら放課後迎えに行くわ。そうね、これからはいっぱい一緒にいられるのだから、また明日にしましょう。ね、エレイナ」

「そうでしたわね。これからは寮でも一緒にできるのでしたわ」

アマリーが納得すれば、エレイナもそれ以上の無理強いはいしない。ルーナは二人に向き直ると、ぺこりと頭を下げた。

「アマリー姉様、エレイナ、今日は本当にありがとう。これからよろしくね？」

「ふふ。楽しくなるわね」

「ええルーナ様、こちらこそ！」

アマリーに頭を撫でられ、ルーナははにかんだ笑みを浮かべる。

「貴女の部屋の片付けは、荷物を運んできた家の者がやっておいてくれたはずよ」

「はい、姉様」

「ルーナ様、ゆっくり休んで下さいませね」

「うん。エレイナもまたね」

そう言っアマリーとエレイナに別れを告げると、ルーナは獣たちを連れて、自分の部屋へと向かったのだった。

「ここだ……」

『L・リヒトルーチェ』『C・クライン』と書かれたプレートのドアを見上げ、ルーナはそつとつぶやいた。

彼女の部屋は、階段を挟んだ西側の端——アマリーたちの部屋とは、階段を中心にちょうど対称になる場所だった。

「クラインさんっていうのが同居者かあ……。あれ、クラインってどこかで聞いたような……」

しばらく考え込んだものの思い出せなかったため、ルーナはひとまずそれを頭から追い出して、部屋に入ることにした。

「えっと、鍵、鍵……」

先ほど寮監室りょうかんしつで渡された鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。カチャリと音を立てて鍵があいたのを確認すると、ルーナはゆっくりとドアを開けた。

「お邪魔します」

なんとなくそうつぶやいてしまうのは、そこが自分の部屋という自覚がないからだろうか。

玄関の向こうはリビングスペースになっていた。窓側の中央には暖炉が備え付けられており、近くには大きなソファとローテーブルが配置してある。

暖炉の横の窓は、片方が出窓で、もう一方がベランダに続く大きなものだ。そこに野外用のテーブルと椅子が置かれているのが、レースのカーテン越しに見える。

ルーナがリビングを見回せば、左右——向かい合わせの壁面に、寮生の個室に続くと思われるドアがあった。

（このリビングが二人の共用スペースってことだね。でも、どっちがわたしの部屋になるんだろう？）

二つのドアを交互に見やり、ルーナは途方に暮れる。だがすぐに、一方のドアノブに林檎りんごを象かたつた木製のプレートがかけられているのに気づいた。

「もう一方にはついてないし、これって私物っぽいよね……。つてことは、あっちがわたしの部屋かな」

ルーナは独りごちると、何もかかってない方のドアへ近づいた。

「一心……つと」

何気なく言いながら、彼女は控えめにドアをノックする。

しばらく経って、何も反応がないことを確認すると、ルーナはゆっくりとドアを開けた。

「あ！ やっぱり正解だね」

彼女は窓際に置かれたベッドを見て声をあげた。その枕元には、見慣れたぬいぐるみが置かれてる。

（ピンク色のひよこなんて謎のぬいぐるみは、わたししか持ってないよねえ……）

数年前、父親にプレゼントされたぬいぐるみは、ルーナが両手を回してちょうど収まる大きさだ。その奇抜な色には驚いたものの、愛嬌のある顔立ちが気に入っている。しかも、父親が買ってくれたものなのでなおさらだ。ただ、アイヴァンが何故このぬいぐるみを選んだのかは未だ謎だが。(これがあると、うちにいるみたいでなんか落ち着くかも……)

途端に気が緩んだルーナは、ドアを閉めると弾むようにしてベッドに腰を下ろす。そしてゆっくりと部屋の内装に目を向けた。

壁紙は淡いベージュで細かく花と草木がデザインされている。家具は書き物机にクローゼット、低めの箆笥とドレッサーがあり、すべて白で統一されていた。

ルーナが腰掛けているベッドは、白く塗られた鉄製フレームのもので、カーブで描かれたヘッドボード部分が可愛らしい。寝具は淡いシャンパンゴールドで統一され、ふんだんにレースやフリルがあしらわれている。

そしてベッドのすぐ横には、シリウスとレグルスのためだろうか、彼らがちょうど収まる箱形の寝床まで用意してあった。

「しいちゃんどれぐちゃんのベッドまであるよ」

ルーナが語りかけると、シリウスたちはコクリとうなずきルーナのベッドに飛び乗る。そして彼女を挟んでダラリと横たわった。

入室してからずっと二匹が無言なことに、ルーナは首を傾げる。しかしすぐに、人の気配に聡い彼らのこと、同室者の存在を感じとって話さないのだと気づいた。

(それにしても広いし、快適すぎるよね……)

ルーナは小さく息をついて、心の中で部屋の感想をつぶやく。

昨日まで暮らしていた、実家の部屋に比べれば狭いのだが、前世の記憶がある彼女は、寮の部屋がこれほど充実したものとは思わなかったのだ。

(何はともあれ、今日からは週の大半をここで過ごすだもんね。広くて快適なのは嬉しいことだよ、うん)

自分に言い聞かせると、ルーナはベッドから立ち上がり、クローゼットを開ける。

「父様つてば、わたしの服、全部新調したんじゃ……」

彼女は見たことのない服ばかりが下がるクローゼットに、「はあ」と大きなため息をつく。そして何かを諦めた様子で中に入ったシンプルな白のワンピースに着替えると、他の設備も確認しておこうと白室を出た。

リビングを好奇心のままに移動し、彼女はルームメイトの部屋と思われるドア以外は、すべて確認してみる。

その結果わかったのは、バスルームとトイレが完備されていること、さらにリビングの奥には、小さなシンクが備え付けられたスペースがあるということだ。どうやらここでお茶を淹れることができるらしく、その証拠に横にある食器棚には、カップやソーサー、紅茶缶などが置かれていた。

(あれ、でもコンロがないよね……)

材料は揃っているものの、肝心のお湯を沸かす設備がなく、ルーナは首を傾げる。しかし、とりあえずと食器棚からやかんを出したところで、ハッと気がついた。

「これ、魔道具だ！」

思わず声をあげて見ると、やかんの下部に魔法陣と魔石まじせきが組み込まれているのがわかる。(なるほど。これはあれだね、魔道具版湯沸かしポットっていうわけだ)

納得すると今度は試したくなるのが人の常つね。ルーナはワクワクしながらやかんの蓋ふたを開けると、シンの蛇口を捻ひねってやかんに水を満たした。

「わあ！」

彼女の口から思わず感嘆の声が漏れる。

水を入れた途端、やかんの側面が見る間に熱を持ったのだ。

ルーナは慌てて側面から手を離すと、やかんをそばにある小さなテーブルに置く。すると、あっという間に、やかんの口から白い湯気が噴き出した。

料理をする彼女が、魔道具まじツクツクルのポットを知らないのには理由がある。料理人には一流に近づくほど、便利な魔道具を使うのは手抜きという風潮があり、専属の料理人たちがいる公爵家ではほとんど使われないからだ。

「すごい！ 電化製品なんて目じゃないかも」

ルーナはひとりはいしゃいで、茶葉を入れたティーポットにやかんのお湯を注いだ。そして同じように食器棚から取り出した砂時計を傾けた時、彼女の耳にドアが開く音が聞こえてきた。その音に

ルーナが慌ててリビングへ向かうと、そこには一人の少女がいた。

「あっ……」

少女を見て思わず声をあげたルーナに、相手も驚いた目を向けてくる。何故ならその少女は、今日から同じクラスになったコーデリアだったのだ。

「あの、同じクラスのクラインさんだよね？」

ルーナが話しかけると、コーデリアは黙ってうなづく。その素っ気ない態度に怯ひるみつつも、彼女は話を続けた。

「寮の部屋も同じだなんて偶然だよ。えっと、今日からルームメイトとしてもよろしくね！」

クラスも寮の部屋も同じなのだ。親しくなれるなら、親しくなりたい。そんな思いで挨拶あいさつしたルーナだったが、コーデリアに反応はなく、無表情に見返されるだけだ。

お互い無言のまま、気まずい空気が流れる。ルーナはこの状況を打開しようと、思い切って再び口を開いた。

「あの……実はお茶を淹ひれたところなんだ。このやかんって魔道具なんだよ、すごいよね。それでよかつたら、一緒にどうかな？」

「悪いが断る。それから一言っておくが、たまたま同じ部屋になっただけで、わたしは君と必要以上に関わる気はない。どうでもいい用事なら話しかけないでくれ」

それは疑いようもない拒絶だった。

ルーナは一瞬間わたれたことが理解できず、呆然とコーデリアを見つめる。しかし彼女は、その視

線が忌々しいと言わんばかりに、ふいっと顔を背けた。

「グルルッ」

「シャーッ」

何も言えないでいるルーナの代わりに、シリウスとレグルスが威嚇の声をあげる。

「しいちゃん、れぐちゃん、やめて！」

二匹の様子にハッと我に返り、ルーナは慌てて彼らを宥めた。

コーデリアはそんな彼女たちにチラリと目を向けたものの、何も言うことはなく、ただ静かに背を向けて自室へと消えていった。

パタンと閉まるドアに、ルーナは悲しげな視線を送る。

「なんであんなに頑ななのかな……」

教室でもそうだったし、今もそうだ。何故か攻撃的になつて相手を遠ざけようとする彼女に、ルーナは釈然としないものを感じてつぶやいた。

(まるでハリネズミみたい……)

鋭い針で身を守る動物と、きつい態度で人を遠ざけるコーデリアが重なり、ルーナは知らず唇を噛み締めていた。

そんな彼女を慰めようと思ったのか、シリウスとレグルスが足元にすり寄ってくる。

ルーナは二匹の頭を撫でると、ほんの少しだけ湧き出た学校生活への不安を、振り払うようにふるふると頭を振った。

第二章 歪められた正義

それはルーナたちがレングラウンド学院に入学する、ひと月ほど前のことだった。

クレセニア王妃であるキーラは、妃の宮にいくつかある談話室で寛いでいた。彼女の好みによって赤と金で統一された豪華な室内は、暖炉の炎のおかげで外とは無縁の暖かさだ。

ぬくもりをくれる暖炉の炎は、本来ならば心をも温めるものはず。だが、しっかりとカーテンが閉められ、その炎だけが光源となっているため、室内には何やら怪しげな雰囲気が漂っていた。

暖炉の前には、全面に刺繍が施された布張りの二人用のソファが二脚、テーブルを挟んで向かい合うように置かれている。その片方にキーラが座り、並んで隣に同年代の男性が腰掛けていた。

彼はサイアス・ベルフーア。国王の親戚であり、公爵位を持つ人物だ。

王妃との良からぬ仲を噂される彼は、それが噂だけではないことを示すように、クレセニア最高位の女性の腰を、馴れ馴れしく抱き寄せている。

「サイアス。先日、リュシオンに送り込んだ刺客が、散となって帰ってきたらしいわね。あれがエアドルトより戻ったあたりから機会を窺っていたらしいけど……役に立たないこと」

不機嫌を表すように、手元の羽根扇を閉じたり開いたりしながら、キーラは隣に座るベルフーア公爵を睨んだ。